

國學院大學學術情報リポジトリ

中国人日本語学習者の同形異義語における誤用を減らすための学習法：

日本語と中国語の間で共通の意味を持たないD型を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 顧, 偉長 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000873

中国人日本語学習者の同形異義語における誤用を 減らすための学習法

—日本語と中国語の間で共通の意味を持たない

D型を中心に—

顧 偉長

【キーワード】 同形異義語 日本語独自義 中国人学習者 対照情報提示 同形異義語学習法

1. はじめに

中国人日本語学習者の同形異義語における認知処理について、数多くの研究がなされてきた。例えば、三浦（1997）、陳（2003）、加藤（2005）、小森ほか（2008、2012、2014、2018）、李（2006）、費（2015）、河住（2005、2010）崔（2017）などがある。

以上の先行研究から、以下の点が明らかになっている。

- (1) 中国人学習者は中国語の形態情報と音韻情報を使って、日本語漢字単語を認知処理する傾向がある。
- (2) 学習者の日本語習熟度が比較的低い段階では、日本語と中国語の間で共通の意味を持つO型¹同形語を認知処理する際には中国語義という手がかりがあるため、日本語と中国語の間で共通の意味を持たないD型²より、認知処理しやすい。
- (3) 一方、日本語習熟度の向上に伴い、D型に接触する機会が増え、常に「中国語義が日本語として成立しないこと」を意識することで、中国語義から日本語への負の転移が抑制され、共有義のあるO型より正しく認知処理できるようになる傾向がある。

日本語習熟度の向上に伴い、D型における誤用は自然に減少する傾向が見られるが、初級から上級になるまでの長期間に、少しずつD型に接触の機会を積み重ねる必要があると思われる。

このようなD型における誤用問題をより効率的に減らすため、李（2006）、河住（2010）は学習者に同形語の対照情報を示す必要があると述べ、また、顧（2021）は、学習者に同形語の対照情報を提示するほか、同形語における日中両言語のそれぞれの意味で問題文を作成し、学習者に判断してもらうことを提案している（以下で詳述する）。

本研究では、中国人学習者のD型同形異義語における誤用問題を減らすための同形異義語学習法を提案することを目的に、顧（2021）で示されている提案の効果を検証する。

2. 先行研究

中国人学習者はD型同形語における誤用問題について、李(2006)、陳(2003)、加藤(2005)、小森ほか(2008)、河住(2010)、顧(2021)など数多くの先行研究がなされている。これらの先行研究から、以下のことが明らかになっている。

- (1) 日本語習熟度が比較的低い段階では、学習者はD型を認知処理することが難しく、中国語義から理解する手がかりがないため、中国語義から日本語への負の言語転移が生じる可能性が高いことがわかる。
- (2) 一方、日本語習熟度の向上に伴い、D型に接触する機会が増え、D型を認知処理する際、それが既習語である可能性は初級より高いため、既習語を処理する経験から、中国語義による負の転移を抑制し、正しく認知処理できる。

同形語における誤用問題を減らすため、李(2006)では、同形語におけるそれぞれの意味や、使用範囲などの対照情報を学習者に提示することを提案している。李(2006)は、日中同形語の約3分の2が同形同義語であるため、「漢字圏の教師は、詳しく説明しなくても学習者は大体理解できるだろう」という先入観を持っていることを指摘し、また、同形異義語を正しく認知処理するために、「日本語の漢語は日本語のものであり、中国語の漢字・漢語はあくまでも中国語のものだと常に意識させる必要がある」と述べている。また、このタイプの同形語を認知処理する際、常に意味や用法などの対照情報を辞書で確認することが必要であるとも述べている。

顧(2021)では、李(2006)の提案を受け、学習者に同形語の対照情報を提示することから、同形語誤用に与える影響について検討している。4タイプ(0(1)型、0(2)型、0(3)型、D型)³の同形異義語を用いて、同一学習者グループを対象に、第一段階の調査は同形語の対照情報を提示しない、第二段階の調査は同形語の対照情報を提示する形で、前後二段階の日本語自然さ判断課題を行った。

以下に、対照情報提示の例を示す。

表1：顧(2021)対照情報提示の例

● 0(1)型 (共有義+日本語独自義)
● 0(2)型 (共有義+中国語独自義)
● 0(3)型 (共有義+日本語独自義+中国語独自義)
● D型 (日本語独自義+中国語独自義)

そのほか、それぞれの同形語タイプに付き、一個の解答例を示した。

以下の表2に、顧(2021)の第二段階の調査で提示した0(1)型の解答例を示す。

表 2：顧 (2021) 調査 2 解答例 (0(1)型)

解答例：1、研究者は研究に愛情を注ぐものだ。(愛情)				0(1)型同形語
自然	やや自然	どちらとも言えない	やや不自然	不自然
対照情報：「愛情」 あいじょう 0(1)型同形語 (共有義+日本語独自義)				
共有義：異性、相手を思い慕う気持ち。 例文：二人は深い愛情で結ばれている。		日本語独自義：人や物に注ぐ温かな気持ち。 例文：愛情を込めて、料理を作る。		

前後二段階の調査結果を比較することで、学習者に同形語の対照情報を提示する効果を検証した。調査の結果から、D型の対照情報(日本語独自義+中国語独自義)や解答例を示すだけで、日本語習熟度中・上級の学習者のD型における誤用は減少するが、前後二段階の誤用率に有意差が見られないことを明らかにした。

しかし、顧(2021)のD型における中国語独自義による問題文では、同形語の対照情報を「日本語独自義+中国語独自義」のように提示しても、学習者の中国語義の活性化により、自然と判断する可能性がある。また、同形語の対照情報の提示から、中国語義から日本語への負の転移を少し抑制できるものの、D型における日本語独自義に対する認識を深めることはできない。

以上のような先行研究の不足点を補うため、本研究ではD型における日本語独自義を用いて、日本語自然さ判断調査を行う。

3. 研究課題

本調査は、中国人学習者向けのD型同形語学習法を提案することを目的に、以下のリサーチクエスチョンを立てる。

R Q :

D型の対照情報、および解答例の提示は同形語誤用の減少に効果があるか。

予想される結果：

1. 対照情報を提示しない第一段階の調査では、初級学習者は中国語義から認知処理する手がかりがないため、誤用率が高い。一方、日本語習熟度の向上に伴い、既習語を処理する経験から、日本語習熟度初・中・上順に、誤用率が次第に減少すると予想される。
2. 同形語の対照情報や解答例を提示する第二段階の調査では、初級から上級の学習者全員が「中国語義は日本語として成立しないこと」を意識することができるため、中国語義による負の言語転移が抑制され、初・中・上の誤用率はそれぞれ、第一段階の調査より減少すると予想される。

以上のリサーチクエスチョンを検証するため、調査を行う。調査は第一段階と第二段階に分け、仮説に基づいて、分析、考察を行う。

4. 研究方法

4.1 調査の概要

本調査では、D型の語を含む文を調査協力者に提示し、文の適否を判断してもらう。問題文は日本語独自義を使い、日本語としては成立するが、中国人学習者が中国語義から認知処理すると、成立しない文である。

第一段階と第二段階は同じ問題文を使い、この間、第二段階に入る前に、日中両言語の違いについて関心を喚起する情報や解答例を提供する。

4.2 問題文の例と作成のしかた

以下、問題文の1例をあげる。

D型（日本語独自義+中国語独自義）

1、彼は書道の先生をしている。（先生）

本研究の調査対象語は、国立国語研究所(2015)『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』の短単位語彙表データ(閲覧日：2021年5月18日)から、使用頻度の高い語を20語抽出し、問題を作成した。

問題の作成には、Google社のGoogleフォーム機能を使い、事前に作成した調査票にしたがって設問の入力を行った。計20問、各設問に対し、解答は、「自然、やや自然、どちらとも言えない、やや不自然、不自然」の5つの選択肢から選ぶ方法で調査を行った。

4.3 第二回調査の前に調査協力者に提示する情報の例

第二段階の調査の前に、両言語の違いについて関心を喚起する情報を提示することの効果を検証するため、事前に、D型の解答例を調査協力者に提示した。

解答例を以下の表3に示す。

表3：解答例および対照情報の提示

1、お手紙を拝読しました。（手紙）
● 不自然
● 自然
正解は「自然」である
対照情報 手紙 テガミ D型同形語（日本語独自義+中国語独自義）
● 日本語独自義：考えや要件などを記して送る文書。 例文：友人に手紙を出す。
● 中国語独自義：トイレトペーパー。 例文：この便所にはトイレトペーパーがついている。

解答例のところで、問題と意味説明を行う形で、同形異義語の意味構成（日本語独自義+中国語独自義）を説明し、さらに、日中両言語におけるそれぞれの意味を使った例文を提示した。

また、第二段階の問題文を判断する前に、よく解答例のページを確認するように、調査協力者に呼びかけた。

また、D型を認知処理する際に、中国人学習者の注意すべき点を以下のように調査協力者に示している。

表4：D型同形語に注意すべき点

D型同形語を認知処理する際に、注意すべき点
D型の意味構成は（日本語 独自義 +中国語 独自義 ）であるため、日中両言語における共通の意味は存在しない。
(1)問題文を判断する際に、 母語中国語義 を用いて、 自然 と判断した場合、日本語として 不正解 の可能性が高い。 手紙（中国語独自義はトイレトペーパー、日本語にはない意味である）
(2)問題文を判断する際に、 母語中国語義 を用いて、 不自然 と判断した場合、日本語として 正解 の可能性が高い。 手紙（日本語独自義は考えや要件などを記して送る文書、日本語として正しい。）

4.4 調査目的

調査の目的は、第一段階と第二段階の間で調査協力者に日中両言語の違いについて関心を喚起する情報を提示することにより、D型同形語における誤用に減少傾向が見られるかどうかを明らかにすることである。

4.5 調査協力者

本研究を進めるにあたっての調査協力者は、中国語を母語とする日本語学習者である。その内訳は、日本語初級学習者（日本語能力試験N4合格者、N5学習者）10名、中級学習者（日本語能力試験N2合格者、N3学習者）10名と上級学習者（日本語能力試験N1合格者）10名である。

年齢は18歳から31歳で、平均年齢は24歳である。日本語学習歴は6ヶ月から5年、全員日本の教育機関に在籍している、または在籍した経験のある学習者である。

4.6 調査期間・場所

調査はオンラインで依頼し、調査基準を満たす協力者に調査用のリンクを送り、それに解答してもらおうという形式で行った（調査用オンラインページは携帯電話、パソコン両方で開ける設定となっている）。調査期間は2021年6月7日から2021年6月14日である。

4.7 点数の設定について

調査結果を分析するために、「自然5、やや自然4、どちらとも言えない3、やや不自然2、不自然1」のように5段階で点数を設定した。D型での問題文は、日本語独自義を使い、日本語としては正しいが、学習者が中国語義を使って認知処理すると不正解となる文である。

すなわち、中国人学習者が日中同形語を認知処理する際に、母語中国語の活性化が抑制され、日本語として正答となる「自然」を5点、一方、中国語の活性化を抑制できず、日本語として不正解となる「不自然」を1点とし、順に点数を設定している。得点が高いほど、母語中国語義による負の言語転移が抑制され、誤用が少ないことを意味する。

5. 研究結果および考察

5.1 第一段階

本調査の第一段階では、同形語の対象情報や解答例など、両言語の違いについて関心を喚起する情報を協力者に提示していない。

先行研究（三浦（1997）、加藤（2005）、李（2006））から、日本語と中国語に共通の意味を持たないD型同形語における誤用率は、日本語習熟度の向上により、自然に減少する傾向があることがわかる。

本調査の第一段階では、先行研究の傾向を再検証するため、日本語能力レベルによる一元配置分散分析を行った。結果は上級と中級($F(1, 18)=6.161, p<.001$)となり、上級と中級の平均点に有意差があることが分かった。中級と初級($F(1, 18)=2.252, n. s.$)、中級と初級学習者のD型における平均点には有意差は見られなかった。また、上級と初級を比較した結果は($F(1, 18)=29.531, p<.001$)となり、平均点には有意差があることが分かった。

以下、第一段階の結果を表5に示す。

表5：第一段階の結果

第一段階における平均得点および標準偏差		
日本語能力	M	SD
上級	4.19	0.44
中級	3.08	0.51
初級	2.63	0.80
注：Mは平均値、SDは標準偏差を表す。		

以上のように、初級と中級の間では有意差は見られなかったが、上級と中級、上級と初級の間では有意差が確認された。この結果から、先行研究で示されている、日本語習熟度の向上によりD型における習得は進められるという論旨を再検証する事ができたと考える。

以下、両言語における対照情報を提示することの効果を検証するため、第一段階と第二段階の結果を比較しながら、考察を行う。

5.2 第一段階と第二段階の比較

本調査では、同一グループの学習者を対象に、D型同形語に関する対照情報や解答例を提示する事で、学習者のこのタイプの同形語における認知処理に与える効果を明らかにする。第二段階では問題文の内容は変更せず、第一段階の結果と比較する事で、D型同形語の対照情報などを提示する効果を確認することができる。

以下、前後二段階の調査結果を表6に示す。

表 6 : 第一段階と第二段階の比較

日本語能力	第一段階		第二段階	
	M	SD	M	SD
上級	4.19	0.44	4.25	0.49
中級	3.08	0.51	3.77	0.43
初級	2.63	0.80	3.67	0.68

注：M は平均値、SD は標準偏差を表す。

同形語の対照情報および解答例を学習者に提示する効果を検証するため、学習者を日本語能力レベルにより、上級、中級、初級の3グループに分け、対応のあるサンプルのt検定を行った。上級学習者の結果は($t=0.373$, $df=9$, n. s.)となり、この結果と平均値から見ると、D型同形語の対照情報の提示は、上級学習者のこのタイプの同形語における誤用に与える効果は有意なものではないことがわかる。また、中級学習者グループに対応のあるサンプルのt検定を行った結果は($t=2.483$, $df=9$, $p<.05$)となり、この結果と平均値から、中級学習者にD型同形語の対照情報などを提示することで、このタイプの同形語における誤用率は有意に減少する傾向が確認できる。また、初級学習者グループに対応のあるサンプルのt検定を行った結果は($t=3.087$, $df=9$, $p<.05$)となり、この結果と平均値から見ると、初級学習者にD型同形語の対照情報などを提示することは、このタイプの同形語における誤用を減らすには効果があると解釈することができる。

以上の表6の数値をグラフ化したものが以下の図1である。

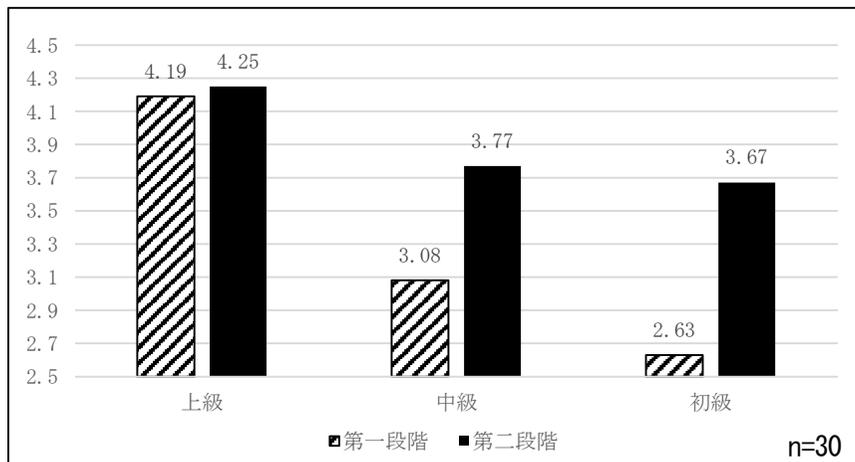


図 1 : 第一段階と第二段階の比較

5.3 対照情報の提示が各日本語習熟度の学習者に与える効果

5.3.1 初級学習者に与える影響

日本語と中国語の間で共通の意味のないD型の対照情報および解答例を学習者に提示する効果は、学習者の日本語習熟度により、大きく分かれる。図1に示したように、D型の対照情報提示から同形語処理に与える効果は、初級学習者に対する場合が最も大きい。

初級学習者の各設問における平均点をグラフ化したものが以下の図2である。

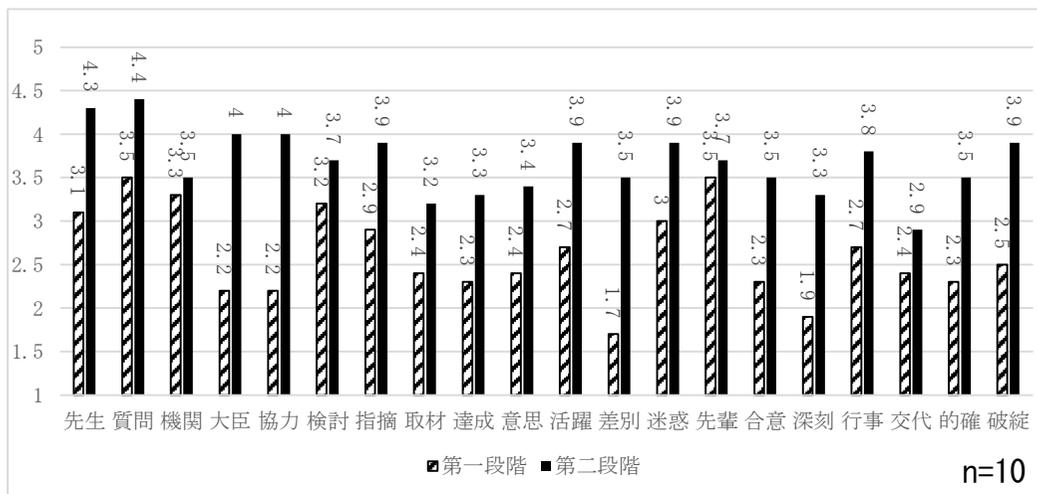


図2：初級学習者の平均点の比較

以上の図2に示したように、初級学習者に同形語の対照情報を提示したことで、第二段階の平均点は20問、全て第一段階より上回る結果となっている。その中で、学習者の認知処理に大きな影響を与えたと見られる問題は、第4問の「大臣」、第5問の「協力」、第12問の「差別」である。

第4問の「大臣」は国立国語研究所（2015）「BCCWJ 現代日本語書き言葉均衡コーパス」の短単位語彙表（以下、BCCWJと略）の中で、出現頻度17191、ランキング534の頻用されている同形語である。しかし、このような日本語の中で頻繁に出現している同形語でも、初級学習者にとっては、語の日本語の意味を正しく認知処理することが難しいという結果になっている。「大臣」という同形語は、日本語独自義の「中央行政機関における各省の長」の意味以外に、中国語独自義の「昔の朝廷の重要な官吏」の意味も存在する。中国語では、「中央行政機関における各省の長」の意味を「部長」という表現で表すのが一般的で、日本語の「〇〇大臣」は中国語に訳すと「〇〇部長」になっている。初級学習者は第4問「彼は外務大臣に就任した」という問題文を認知処理する際に、D型同形語を既習語として処理した経験が少ないため、中国語義を使って不自然と判断している可能性がある。

第5問の「協力」も、BCCWJで出現頻度15437、ランキング597の頻用されている同形語で、日本語と中国語の意味の間でそれぞれ異なる意味が存在している。「協力」の日本語独自義は「ある目的に向かって、相手と力を合わせてことに当たること」で、中国語独自義は「ある目的に向かって、共に力を合わせてことに当たるさま」となっており、使用条件と意味が日本語

と中国語では異なる。中国語義の「協力」の意味を日本語に訳すと「力を合わせて」や「心を一つに」の表現が一般的であり、多人数で大きな目標に力を注ぐ場合に使われる。一方、第5問の「夫は育児も家事も協力してくれる」の問題文において、学習者の中国語義が活性化してしまうと、「多人数」、「大きな目標」の条件を満たさないため、不自然と判断する人が多くなったと考えられる。

第12の「差別」は、近年、ジェンダー平等や人種平等など分野で良く見られる同形語であるが、中国語と日本語の意味の間で大きなズレが存在している。「差別」の日本語独自義は「偏見などによって取り扱いに差をつけること」の意味を持つが、中国語独自義は「形式や内容の違いやへだたり」である。日本語の意味を中国語に訳す場合「岐視」、「看不起」とするのが一般的で、全く違う語となっている。学習者は問題文の「人の性別によって差別してはいけない」を認知処理する際に、中国語義を使って、「人の性別を分けてはいけない」（中国語訳：不可以区分人的性別）と理解する可能性があるため、誤用が多く見られたと考えられる。

初級学習者はD型同形語を認知処理する際に、「大臣」、「協力」、「差別」のような頻用される同形語であっても、先行研究で指摘されているように「中国語独自義は日本語として成立しない」を認識することは難しいため（陳（2003）、李（2006））、第一段階で見られた誤用率が高くなっていると考えられる。一方、調査の第二段階でD型同形語の対照情報や解答例を提示した結果は(t=3.087, df=9, p<.05)となり、対照情報の提示により、D型同形語における誤用率は有意に減少する傾向が確認された。初級学習者のこのタイプの同形語における誤用を減らすには、このような学習を行うことが効果的であると考えられる。

5.3.2 中級学習者に与える影響

上記の図1で示したように、D型同形語の対照情報提示から中級学習者の同形語処理に与える効果は、初級学習者に次ぎ、誤用率は有意に減少する傾向が見られる。

中級学習者の各設問における平均点をグラフ化したものが以下の図3である。

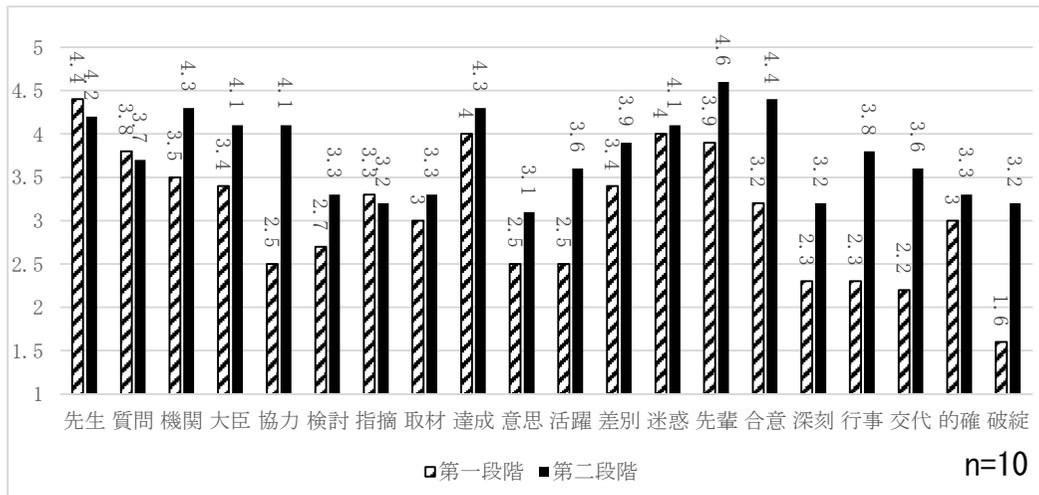


図3：中級学習者の平均点の比較

図3に示しているように、中級学習者に同形語の対照情報を提示することで、第二段階の平均点は第1問、第2問以外、第一段階より上回る結果となっている。平均点の上昇幅が特に大きく見られるのは、第5問の「協力」のほか、第17問の「行事」、第18問の「交代」、第20問の「破綻」である。

第17問の「行事」は、日本語独自義の「一定の日を決めて行う儀式や催し」の意味以外に、中国語独自義の「実際にものごとを行うこと」(その1)、「ことを進めること」(その2)の意味も存在する。日本語の「行事」の意味は中国語では「儀式」、「活動」の表現を使うのが一般的で、学習者は問題文の「会社創立20周年の記念行事に参加する」を認知処理する際に、中国語義が活性化してしまい、日本語の「記念行事」より、中国語の「記念活動」の方が自然であると判断するため第一段階では誤用率が高くなっていると考えられる。

第18問の「交代」は、日本語独自義には「ある周期で人が代わり合うこと」(1)、「何らかの理由によって人が入れ替わること」(2)、中国語独自義として「仕事などの引き継ぎをすること」(1)、「言い聞かせること」(2)、「関係者にはっきり説明すること」(3)、「誤りや罪を白状すること」(4)の意味も存在する。中国語独自義のうち、3の「関係者にはっきり説明すること」と4の「誤りや罪を白状すること」は頻用される意味で、中国語で「交代」がよく出現する例として、「我把安全施工注意事項跟大伙儿做了交代」(日本語訳：私は安全作業の注意事項をみんなに詳しく説明した)(中国語独自義その3)、また「快交代罪行」(日本語訳：さっさと犯行を白状しろ)(中国語独自義その4)が挙げられる。学習者は「問題文「発電所は24時間、3交代で働く」を認知処理する際に、以上の頻用される中国語独自義3、4で日本語独自義の意味を理解する手がかりがなく中国語独自義で「判断してしまう」ことが、第一段階で誤用率が高い原因と推測される。

第20問の「破綻」は、日本語独自義には「ものごとや関係がうまくいかなくなり、だめになること」の意味のほか、中国語独自義として「衣服のほころびたところ」(1)、「隠している欠点や短所」(2)の意味がある。中国人学習者は問題文の「バブルの崩壊で会社の経営は破綻した」を認知処理する際に、「会社の経営」と中国語独自義の「衣服のほころびたところ」や「隠している欠点や短所」を結びつけることができないため、誤用が多く見られたと考えられる。

中級学習者はD型同形語に接触する際、既習語である可能性が初級学習者より高いため、初級学習者より誤用が減少しているが、上級と比べれば、まだ誤用が多く見られる。一方、同形語対照情報や解答例などを中級学習者に提示することで、対応のあるサンプルのt検定を行った結果は(t=2.483, df=9, p<.05)となり、中級学習者のD型同形語における誤用率は有意に減少する傾向が確認された。

5.3.3 上級学習者に与える影響

本調査の平均点および対応のあるサンプルのt検定から見ると、初級、中級学習者にD型同形語の対照情報を提示することは、誤用率の減少に効果があると言える。一方、上級学習者にD型同形語の「日本語独自義+中国語独自義」の対照情報や解答例を提示した結果、20問の内11

問が提示前より低い平均点となった。対照情報の提示は上級学習者のこのタイプの同形語における誤用を減らす効果が見られないことが明らかになった。

上級学習者の各設問における平均点をグラフ化したものが以下の図4である。

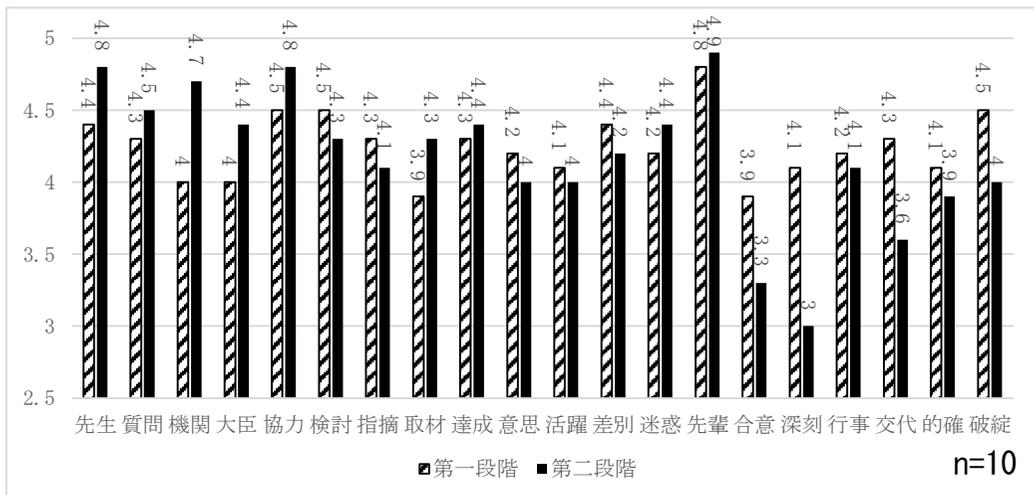


図4：上級学習者の平均点の比較

図4に示しているように、上級学習者に同形語の対照情報を提示したことで、第二段階の平均点は第1、2、3、4、5、8、9、13、14問、第一段階より上回る結果となったが、残り11問（第6、7、10、11、12、15、16、17、18、19、20問）は第一段階より下回る結果となっている。特に誤用率が増えた問題は、第18問の「交代」のほか、第16問の「深刻」、第15問の「合意」である。

第16問の「深刻」は日本語独自義には「事態が非常に切迫している」（1）、「問題の重大さに心が深くとらわれること」（2）、中国語独自義には「認識や言語、内容などが本質に触れていて深みがあること」（1）、「感じ方や印象が深いこと」（2）、「事態が大きいこと」（3）の意味もある。中国語の「深刻」は「顔」と共起しないため、上級学習者は問題文の「彼は深刻な顔をしています」を認知処理する際に、D型における既習語を処理する経験から、第一段階で得られた平均点は「やや自然」の4点を越えたと考えられる。第15問の「合意」も、日本語独自義には「当事者の意見や意思が一致すること」、中国語独自義として「気に入ること」の意味がある。上級学習者は問題文「会社の経営方針については役員全員が合意している」を認知処理する際に、「合意」が既習語の場合はすぐ判断できる。既習語ではない場合も、「経営方針」と「気に入ること」は共起しないため、既習語を処理する経験から正しく判断できる。第一段階における上級の平均点が初中級より高いという結果は、李（2006）で示されている結果を再検証できたと考える。

しかし、第15、16問をはじめ、20問の内11問の平均点を見ると、第二段階は第一段階より下回る結果となっており、このタイプにおける誤用を減らすにはマイナス的な効果があることがわかる。このような現象の原因は対照情報の提示内容にあると考える。

上節の表3のように第二段階の調査前に「問題文を認知処理する際に、母語中国語義を用いて、自然と判断した場合、日本語として不正解の可能性が高い。」および「問題文を認知処理する際に、母語中国語義を用いて、不自然と判断した場合、日本語として正解の可能性が高い。」と学習者に提示した。初中級学習はD型に接触する際、既習語である可能性は上級より低いいため、第一段階で中国語義が活性化してしまい、誤用が多く見られる。表3「問題文を認知処理する際に、母語中国語義を用いて、不自然と判断した場合、日本語として正解の可能性が高い。」の提示は、学習者の中国語義から日本語への負の言語転移を抑制し、中国語義からD型における誤用を減らすには効果があると見られる。

一方、第一段階で、上級学習者は既習語を処理する経験から、中国語義による負の転移を抑制し、正しく認知処理できているが、表3の「問題文を認知処理する際に、母語中国語義を用いて、自然と判断した場合、日本語として不正解の可能性が高い。」のような情報提示は、逆に学習者の中国語義の活性化を喚起してしまい、D型における誤用を減らすにはマイナス的な効果が見られることになったと考える。

以上の結果から、D型同形語の対照情報や解答例を学習者に提示する効果は、初中級学習者に対しては大きいですが、上級学習者にはあまり有効でないことが明らかになった。なお、上級学習者のこのタイプの同形語における誤用をより効率的に減らす学習法については、今後の課題として取り組みたいと考える。

6. おわりに

本研究は、二段階に分けた日本語自然さ判断調査を用いて、中国人初・中・上級日本語学習者を対象に、D型同形語の対照情報の提示がこのタイプの同形語の誤用減少に与える影響を検証したものである。調査の結果から得られた、リサーチクエスションへの答えは以下の通りである。

RQ：

D型の対照情報、および解答例の提示は同形語誤用の減少に効果があるか。

結論：

1. 学習者にD型同形語の対照情報や解答例を提示する効果は、日本語習熟度初・中・上級の順に次第に減少する。特に初級学習者に大きな効果があり、上級学習者にはあまり効果が見られない。初・中級学習者はD型同形語に接触する際、既習語である可能性が上級より低いいため、初・中級学習者に同形語の対照情報などを提示することで、学習者の中国語義の活性化が抑制され、誤用率が有意に減少する傾向が確認された。
2. 一方で、上級学習者はD型同形語を処理する経験は初・中級より多く、既習語を処理する経験から、このタイプの同形語を正しく認知処理できるが、「問題文を認知処理する際に、母語中国語義を用いて、自然と判断した場合、日本語として不正解の可能性が高い。」のような情報提示は、逆に上級学習者の中国語義の活性化を喚起してしまい、誤用を減少するには有意な効果が見られないということが明らかになった。

以上の結果から、初中級をはじめ、同形語の対照情報、つまり同形語の日中両言語におけるそれぞれの意味、用法、また例文を提示することは中国人学習者のD型同形語における誤用を減らすには効果があると解釈することができる。なお、上級学習者のこのタイプの同形語における誤用をより効率的に減らす学習法の開発については、今後の課題としたい。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、調査協力者を集めてくださった、國學院大學大学院諸星研究室所属の丁文静氏に深く感謝致します。

注

1. 文化庁(1978)では、日中両言語の意味の比較に基づき、同形語を3つに分類している。その中で、日中両言語の意味の一部が共通しているO(Overlap)型と分類している。
2. 文化庁(1978)では、日中両言語の意味の比較に基づき、同形語を3つに分類している。その中で、日中両言語の意味が全く違うD(Different)型に分類している。
3. 王(2015)は日中同形語辞書における同形語分類法を分析し、以下の分類法を提案している。同形語を、Same、Similar(SS型)：意味が同じ或いは近い語、Overlap(O型)：意味が部分的に重なる語、Different(D型)：意味が異なる語、と大別する。さらにその中で、O型をタイプによってさらに3分類している。O(1)型は日中両語の意味の一部が重なっているが、日本語に独自の意味(独自義)があるもの。O(2)型は日中両語の意味の一部が重なっているが、中国語に独自の意味があるもの。O(3)型は日中両言語の意味の一部が重なっているが、日本語と中国語にはそれぞれ独自義があるもの。

参考辞書

王永全、小玉新次郎、許昌福(2007)『日中同形異義語辞典』 東方書店

郭明輝、磯部祐子、谷内美江子(2011)『日中同形異義語 1500—日本語と中国語の意味をより深く理解するための』 国際語学社

参考文献

王榛娟(2015)「日中同形語辞典の問題点及びその改善策をめぐって」『芸術工学研究』22, pp. 59-65, 九州大学大学院芸術工学研究院紀要『芸術工学研究』編集委員会

加藤稔人(2005)「中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程の違い—」『日本語教育』125, pp. 96-105, 日本語教育学会

河住有希子(2005)「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』7, pp. 53-65.

- 河住有希子 (2010) 「中国語母語話者による日中同形語の学習方法について」『JSL 漢字学習研究会誌』2, pp. 35-37.
- 顧偉長 (2021) 「中国語を母語とする日本語学習者の日中同形異義語における誤用を減らすための提案—同形語の理解についての調査結果を踏まえて—」『国学院大学日本語教育研究』12, pp. 56-74, 国学院大学日本語教育研究会
- 国立国語研究所 (2015) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』短単位語彙表 (Version1.1) 国立国語研究所コーパス開発センター
- 三浦久美子 (1997) 「日中同形語が学習者に与える影響: 日本人の中国語学習者を対象にして」『言語文化』6, pp. 89-96, 愛知淑徳大学言語文化学会
- 小森和子、玉岡賀津雄、近藤安月子 (2008) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理: 同形類義語と同形異義語を対象に」『日本語科学』23, pp. 81-94.
- 小森和子・三國純子・徐一平・近藤安月子 (2012) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得—中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較—」『小出記念日本語教育研究会』20, pp. 49-61.
- 小森和子・玉岡賀津雄・斎藤信浩・宮岡弥生 (2014) 「第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の日本語の漢字語の習得に関する考察」『中国語話者のための日本語教育研究』5, pp. 81-94.
- 小森和子・早川杏子・三國純子 (2018) 「中国語母語話者は和製漢語を正しく意味推測できるのか: 日本語未習者への調査から—」『中国語話者のための日本語教育研究』9, pp. 96-83.
- 陳毓敏 (2003) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について—同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプからの検討—」『平成15年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 174-179, 日本語教育学会
- 費曉東 (2015) 「中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢字単語の学習過程—中日2言語間の形態・音韻類似性による影響—」『学習システム研究』1, pp. 48-58, 広島大学学習システム促進研究センター
- 文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 李愛華 (2006) 「中国人日本語学習による漢語の意味習得—日中同形語を対象に—」『筑波大学地域研究』26, pp. 185-203.
- 崔娉 (2017) 「日本語読解における未知漢字語彙の意味推測: 中国語を母語とする日本語学習者を対象に」『中国語話者のための日本語教育研究』8, pp. 32-45.

付録

調査票	
1. 彼は書道の先生だ。(先生)	
2. 分からないことがあれば質問してください。(質問)	
3. 彼女は金融機関で働いている。(機関)	
4. 彼は外務大臣に就任した。(大臣)	
5. 夫は育児も家事も協力してくれる。(協力)	
6. 会議を開いて、改善策について検討する。(検討)	
7. 不備のある点を指摘する。(指摘)	
8. 事件の関係者を取材する。(取材)	
9. この目標は予定通り達成した。(達成)	
10. 他国に反対の意思を示す。(意思)	
11. 選手の活躍が期待される。(活躍)	
12. 人の性別によって差別してはいけない。(差別)	
13. ご迷惑をおかけいたしました。(迷惑)	
14. 彼は私の大学院時代の先輩だ。(先輩)	
15. 会社の経営方針については役員全員が合意している。(合意)	
16. 彼は深刻な顔をしています。(深刻)	
17. 会社創立 20 周年の記念行事に参加する。(行事)	
18. 発電所は 24 時間、3 交代で働く。(交代)	
19. 問題点を的確に指摘した。(的確)	
20. バブルの崩壊で会社の経営は破綻した。(破綻)	

● 以下の回答例および対照情報の提示を見てから、もう一度解答してください。	
解答例：1. お手紙を拝読しました。(手紙)	D 型同形語
(自然)	不自然
対照情報：「手紙」 てがみ D 型同形語 (日本語独自義+中国語独自義)	
日本語独自義：考えや要件などを記して送る文書。 例文：友人に手紙を出す。	中国語独自義：トイレトペーパー。 例文：この便所にはトイレトペーパーがついている。
D 型の意味構成は (日本語 独自義 +中国語 独自義) であるため、日中両言語における共通の意味は存在しない。	
● 問題文を判断する際に、 母語中国語義 を用いて、 自然 と判断した場合、日本語として 不正解 の可能性が高い。 手紙 (中国語独自義はトイレトペーパー、日本語にはない意味である)	
● 問題文を判断する際に、 母語中国語義 を用いて、 不自然 と判断した場合、日本語として 正解 の可能性が高い。 手紙 (日本語独自義は考えや要件などを記して送る文書、日本語として正しい。)	